

価値論講義準備過程でスラッフアが生産方程式を着想した源は何か

著者	松本 有一
雑誌名	経済学論究
巻	68
号	3
ページ	1-19
発行年	2014-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10236/13403

価値論講義準備過程でスラッフアが生 産方程式を着想した源は何か

What was the Source of Idea of Sraffa's “Equations” ?

松 本 有 一

Piero Sraffa started preparing his lecture notes on “Advanced Theory of Value” in the summer of 1927. He was to be appointed to a University Lecturer in Economics at the University of Cambridge. In the process of making lecture notes Sraffa had an idea of his own theory of value. He called it “equations”. This paper has two purposes. One is to find out how Sraffa came up with the idea of “equations”. The key term will be “Physical Real Costs” in his manuscripts. The other is to bring Sraffa’s research programme at that time to light. They may give a new interpretation of his main work, *Production of Commodities* published in 1960.

Yuichi Matsumoto

JEL : B12, B31, B41

キーワード : スラッフア、価値論講義、生産方程式、物的実質費用

Keywords : Sraffa, Advanced Theory of Value, equations, physical real costs

はじめに

スラッフア (Piero Sraffa, 1898-1983) の『商品による商品の生産』(Sraffa 1960) の生産方程式が、1927年11月末までには一応の定式化がなされていたことは、すでに明らかにされている¹⁾。しかしなぜこの時期に、つまりスラッフアがケインブリッジ大学経済学講師としての最初の講義科目「上級価値論 Advanced Theory of Value」(以下では単に価値論講義という)の準備過程で

1) 松本 (2009) およびここで紹介されている De Vivo, Gilibert などの先行研究参照。

それがなされたのかは、必ずしも明示的には論じられていない。当初の予定から 1 年遅れて 1928 年 10 月に講義は開始された。講義ためのノートは、少なくとも 1 学期 16 回の講義に関しては非常によく整理された形で残されているが、そこに生産方程式は一切出てこない（価値論講義全体は 2 学期間で提供された）。

スラッフアの死後遺された文書類はスラッフア・ペーパーズ (Sraffa Papers) として英国ケインブリジのトリニティ・コレッジ (Trinity College, Cambridge) に保管されている。価値論講義ノートはスラッフア自身が一まとまりのものとして残しており、カタログ番号 D2/4 として整理されている。しかし、講義の準備過程で作成された覚え書や抜き書きなどはすべて、『商品による商品の生産』に関連した文書として D3/12 のもとで整理されている。

スラッフア・ペーパーズのカタログで、記号 D のもとに Notes, Lectures and Publications が整理され、D1 は Notes、D2 は Lectures、そして D3 は Publications である。D2 は D2/1 から D2/8 までであるが、スラッフアがケインブリジ大学経済学部で担当した 3 つの科目、すなわち上述の「上級価値論」(D2/4)、「Banking on the Continent 大陸の金融制度」(D2/5)、そして「Industry 産業論」(D2/8) のほかは、いくつかの機会での講演原稿といったものである²⁾。

D3 に分類されている刊行物に関するもののうち D3/12 が『商品による商品の生産』に関するもので、D3/12/1 から D3/12/115 に整理されている。トリニティ・コレッジ図書館のカタログには D3/12 全体に関してつぎのように記載されている。

Sraffa drew on notes from as early as 1926 when preparing this work. Annotations dating from the 1950s made on the files in which these notes were kept indicate the items that Sraffa felt were most important, and which were often removed to other files as he was preparing for

2) D2 に分類されているノート類のカタログ記載事項は本稿の付録資料として掲載する。なお、カタログ D2/5 で Continental Banking と記載されている科目名は Banking on the Continent が正しい。

publication. Notes and formulae by Abram Besicovitch are evident in a number of these files.

ここにはスラッフアが『商品による商品の生産』の準備を1926年から始めていたように記述され、またD3/12/2に収められている覚え書が1926年から1955年のものとカタログに記載されているが、筆者が閲読したかぎりでは1926年に書かれたと判るものを確認できなかった。

『商品による商品の生産』として出版されることになる仕事を、まさに出版に向けてスラッフアがまとめ始めたのは1955年1月のことであった。といっても、この題名が決まっていたわけではない（印刷用の原稿を作成し始めた時点では「OUTLINE OF AN ECONOMIC SYSTEM」と題されていた）。いずれにしても、1955年1月から3月に地中海のマヨルカ島のバルマに滞在して、それまでの覚え書を読み返して整理し、そして出版すべく著作の構想と最初の著述（マヨルカ草稿 Majorca draft）に取り掛かったのである³⁾。

本稿の課題は2つある。第1は、1927年夏から始めた価値論講義準備に際してスラッフアはなぜ生産方程式（スラッフアは単に equations と呼んでいた）の定式化に取り組んだのかを探ることである。加えて、生産方程式はなぜ価値論講義では取り上げなかったのかということも探してみたい。1928年10月に講義は始まったのだが、そして後に追加はあったが、講義開始までには少なくとも1学期16回分の講義用ノートは出来上がっていた。しかしそれ以降もスラッフアはリカード著作集の編集作業に専念するようになるまで、さまざまな覚え書を残している。本稿の第2の課題は、1927年から1928年にスラッフアが書き残したものから、その当時スラッフアが経済学研究について考えていたことのいくつかでも明らかにすることである。

以上の課題を果たすために、つぎのような順で考察を進める。最初に、1927年夏までのスラッフアの経済学研究の過程を概観する。次に、価値論講義の準備を始めた1927年夏の覚え書（ロンドン・ノート）の内容とその後1927年末ころまでの覚え書の内容を検討し、スラッフアが考えていたことを整理する。

3) 1927年から1960年にいたる『商品による商品の生産』の準備過程から出版にいたる過程全般に関しては松本（2010）参照。

1. スラッフアの経済学研究の歩み：1917 年から 1927 年⁴⁾

スラッフアは 1917 年にトリノ大学に入学し、途中兵役があったが 1920 年 11 月に卒業した。卒業研究は「戦中戦後のイタリアでの貨幣インフレーション (L'Inflazione monetaria in Italia durante e dopo la guerra)」と題してまとめられ、ルイジ・エイナウディ教授から高い評価を得て、少数数であったが印刷された。1921 年 4 月から 1922 年 6 月、スラッフアは研究生として LSE (ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス) で学んだ。この時期に J.M. ケインズと会っている。その後、ミラノ地方労働局に勤めたりしたが、1923 年 10 月にペルーシア大学で職を得 (temporary professor)、1926 年 3 月にカリアリ大学の経済学教授になった。

1926 年までに公刊されたスラッフアの学術著作としてはつぎのようなものがある。ケインズから新聞 *Manchester Guardian Commercial* の増刊号 (Supplement) “Reconstruction in Europe” への寄稿依頼があったが、そのために準備した原稿は長かったためケインズはそれを *Economic Journal* (June 1922) に掲載した。“The Bank Crisis in Italy” である。スラッフアが改めて準備した原稿は “Italian Banking To-day” で、上記 “Reconstruction in Europe” No.11 (7 Dec. 1922) に掲載された。また、ケインズの『貨幣改革論』(1923 年) のイタリア語訳を 1925 年に出している。スラッフアの経済理論に関する本格的な論文は、カリアリ大学経済学教授職に応募するための論文「生産費と生産量の関係について」(Sraffa 1925) で、1925 年 12 月にイタリア語で発表された。それでスラッフアはカリアリ大学の教授職を得るのだが、この論文に注目したエッジワースが、当時 *Economic Journal* の共同編集者であったケインズをつうじて、スラッフアに対しこの論文の英語版を寄稿するように要請した。それに対してスラッフアが寄せたのが「競争条件下における収益法則」(Sraffa 1926) であった。

このように見てくると、学生時代から 1923 年ころまでは、スラッフアの関心は明らかに通貨問題、金融制度にあったといえる。しかし、1925 年の論文、

4) この節は Naldi (1998) , (2011) などに依拠しながら論ずる。

そして1926年の論文も、経済学の基本理論に関する、アルフレッド・マーシャルの経済理論を正面から取り上げたものであった。スラッフアはマーシャル理論をいつごろから研究していたのだろうか。Naldi (1998, p.502) は、1923年4月までには（つまりペルージア大学に職を得る前に）スラッフアはマーシャルの『経済学原理』を精読し始めており、それはスラッフアが経済学でのアカデミック・キャリアを決意したためだという。またペルージア大学で学生に対し、マーシャルの『経済学原理』を試験勉強で読むように指示していたという。

スラッフアはケインブリジ大学経済学講師 (University Lecturer in Economics) に採用され、1927年10月から講義を担当することになる⁵⁾。大学講師の講義担当の義務としては、各学期1回60分で週2回の講義であった（年間3学期ある）。最初の担当科目は経済学トライポス第二部 (Economics Tripos, Part II) 用に「上級価値論 Advanced Theory of Value」で、この科目名称はスラッフアが担当するために設けられた。スラッフアは講義の準備もあつてか、1927年7月7日にイタリアを発ち、11日に英国に到着して、しばらくロンドンに滞在した (Naldi 1998, p.505)。英語の上達のためもあったという。

2. 1927年夏（ロンドン）から1927年末まで

スラッフアは1927年夏にロンドンで10月からの講義のための準備をしていた。そのときに作成した文書が残されている。スラッフア・ペーパーズのカタログで「D3/12/3 “Notes: London, Summer 1927 (Physical real costs etc)” including preparations for lectures (4 docs) 1927」と記載されているファイルである。これはスラッフア自身が整理したと思われるが、3穴ノート用の茶色の紙製フォルダーに収められている。遺稿が整理された際に、ノート、覚え書の各葉に付された整理番号は1から76で、77が紙製フォルダーに付されている。紙製フォルダーにはスラッフアによって「Notes / London, Summer 1927 / (Physical Real Costs etc.)」と鉛筆書きがされている（/は改行を示す）。この書き入れから、このフォルダーには1927年夏にロンドン

5) スラッフアがケインブリジ大学講師に採用されるにいたる経緯に関しては松本 (1992) 参照。

ンで作成されたノートが収められていることがわかる。これをロンドン・ノートと呼ぶことにする。ロンドン・ノートは時期的にみても内容的にも 1927 年 10 月からの価値論講義で何を取り上げ、何を学生に話そうか、そういうことを書き留めたノート、覚え書であることは間違いない。講義で取り上げようと考えていた項目が列挙された覚え書がある (D3/12/3 : 3-4)。実際に教室で使用されたと思われる講義ノートは、スラッフア・ペーパーズの D2/4 に収められている。

スラッフアはフォルダーに「Physical Real Costs etc.」と記しているが、全体の課題を当初から physical real costs としていたとは考えにくい。後からみて physical real costs に関して参照すべき重要な覚え書が含まれていたということであろう。一式の覚え書の大半には右肩にスラッフアによってページ番号が付されている。これとは別に遺稿整理の際に整理番号が付されている。スラッフアによるページ番号は 1 から 71 であるが、それと整理番号との対応は次のとおりである。括弧のなかの数字がスラッフア・ペーパーズの整理の際に付された整理番号である。

1(5)~22(26)、23(28)~27(32)、28(35)~44(51)、45(54)~48(57)、49(52)、50(52 の裏)、51(53)、52(58)~63(69)、64(69 の裏)、65(70)~71(76)。したがって、ページ番号が付されていないものは、整理番号の 1~4、27、33、34 である。これは、遺されたファイルの中の状態を、その順番をふくめて、スラッフアが亡くなった時点での状態を保つということによって生じている⁶⁾。

ここでは 1927 年夏時点でスラッフアが価値論講義についてどのように考えていたかがわかるものをいくつかピックアップすることにする。

まずは「全体の計画 General Scheme」と題された覚え書で、価値論講義の全体構想を書き記したものであり、もともとのページ番号で 1 から 3 (最初の 3 枚、D3/12/3 : 5-7) に記されている⁷⁾。少し長いが引用する。

6) スラッフア自身がノート類をフォルダーに収めたとき、日付の記入があつたり、ページ番号が付されて一まとまりにされている場合は良いのだが、古いものから新しいものへと執筆順になっているとは限らないので注意が必要である。

7) D3/12/3 はファイル番号でコロンのあとの数字はノートなど各葉に付された整理番号である。

全体の計画

価値論の冒険の旅。かつての経済学者に重要だった問題は国富であった。そして後には国富の分配で、問題は穀物だ!! リカードによる経済学
の定義。これはなんと後に価格決定の手法の考察に逆転され、分配は生産
要素の価格決定と見なされるようになった。技術的な外観に対する哲学的
な外観。科学の進歩の全体の概要。後者に関するわれわれの研究の目的。
しかし、今日の理論は前者のために考案された素材や要素で構成されて
いる。(われわれの考察の重要な論点は、今日の理論の欠陥がこの事実によ
っているに違いないということである。) 前者の立場からは重要である
いくつかの問題を別にして、それらは今日の理論との関係でことごとく重
要性を失っているのだが、伝統の力によってなお近年の教義に大いに影響
を与えている。例えば、費用と効用のどちらが、あるいは両方が(そして
どちらが支配的に) 価値を決定するのか。

価値論が経済学の中心的教義となったのはリカードによってであり、学
派や論争は彼が元である。それゆえ、彼から始まっているのである。彼の
反地主は複雑である。それは彼の費用—価値の理論にどれだけ影響してい
るのか。地代は費用に入らないと退けられている。この理論の広がり。経
済学者の実際的な成功による(アシュレーを見よ)。しかし、その後、マ
ルクスが取り上げ、労働者の武器として使用された。(リカードの無頓着
は、この立場を明確にするのに、「費用」が意味するものがどんなものであ
るとわれわれが信じようと、彼の時代は資本家と労働者の間の闘争の不在
と特徴付けられることである。) ジェヴォンズ、メンガー、ワルラスの効
用の即時の(?) 同時の成功。発見はいつも折よく起こる。そして、常の
ことだが、成功した先行者はすべてをすでに発見していたということが後
に判ることになる。反社会主義のうちに見出される論拠(ファナコーネ、
ヴィーザー、アシュレーを見よ)。党派的な目的で考案された(あるいは
一般的にそう受け取られている) 諸理論には、科学的価値はないと考える
べきではない。それらは科学的価値があり、知識に付け加わる真実の要素
を含んでいて、二度と失われることはほとんどない。理論はこのように進

化していく。マーシャルの仕事は2つの学派の成果を結び付けている。価値の「原因」、均衡概念、基本原則など、われわれがマーシャルに特有の応用と考えるものはどれもそうだ。マーシャルに関する、そしてマルクスの剰余価値に対するリカードの関係に関する奇妙な誤解。古典派と正統派とを結びつけたという信頼からマーシャルを受容することは、古典派がそうであったようには社会主義的な解釈に役立つことはない。ナンセンス。マルクスの剰余価値は、その唯一の原因である労働に、ないしは価値の原因の一つであったとしても労働に依存するのではない。しかし、価値には比例する。2つの観念の相違に関して詳細に説明する。マルクスが次のように言っているというばかげた信念。つまり、「労働は価値の唯一の原因である。それゆえすべての価値は労働に行かなければならない。」[しかしながら、マルクスに関してリカードとマーシャルの間に一つの違いがある。リカードは「貨幣で表した生産費は、利潤とともに労働の価値を意味している。…しかし生産費は、いくらかの乖離はあるが、雇用された労働に比例する」という。これはマルクスには重要である。しかし、そのような前提はマルクスによってなされていない。マルクスは語句の通常の意味で利潤は生産費に入っていないとは決して言っていないことに注意せよ。]

(D3/12/3 : 5-7) Porta(2001, pp.251-252) で部分的に引用されている。

講義準備の過程で作成された覚え書の中にスラッフアが著書の構想を持っていたことを示すものが残されている。その中の記述から講義開始が延期された理由の一端が伺える。その覚え書は1927年11月のものと判断でき、「Impostazine del libro」と題してイタリア語で記述された一文である (D3/12/11 : 55)。この覚え書はPorta (2001)、Pasinetti (2001)、De Vivo (2003) にイタリア語原文が掲載され、後者2つには各々による英訳が掲載されている。パシネッティは「Layout of the book」と訳し、デ・ヴィーヴォは「Structure of the book」と訳している。以下は2つの英訳を参照しての日本語訳である。

本の概略

ただ一つの方法は歴史を逆にたどることで、次のような方法だ。経済学の現在の状態。いかにしてそこにたどり着いたか。そして古い理論との違いと古い理論の優位性を示す。それからその理論を説明する。時系列にたどるなら、ペティ、フィジオクラート、リカード、マルクス、ジェヴォンズ、マーシャルで、私が目指しているところを説明することで私の理論の趣意をまず説明する必要がある。それは最初に理論をすべて提示することを意味する。マルクスは『資本論』を出版し、それからそれに続いて『学説史』を完成することはなかったが、マルクスのように終わってしまう危険はある。もっと悪いことに、彼は、歴史的な説明なしに自身を理解させることに成功しなかった。私の目的はこうだ。歴史を示す。歴史は実際重要な事項である。私自身に理解させる。そのために必要なことは、私が未知の世界に直進することである。マーシャルからマルクスへ、不効用から物的費用へ。

(D3/12/11:55)

もう一つ関連する資料として、やはり 1927 年 11 月に記されたと考えられる「歴史 History」と題された記述をあげておこう。

歴史

古典派経済学 Classical Political Economy (リカードの時代) あるいは

A. スミス?

ペティからリカード

正しい概念 (基本的前提) 素朴な、未発達の技法

(A. スミスは強い「俗流的な」傾向があった。かれは「近代の経済学の創設者」であると十分言ってよい。

俗流経済学 Vulgar Political Economy (ミルの時代)

マルサスからスチュアート・ミル

これはまったく間違い。彼らにあるのは近代経済学の間違った概念と

古典派の未発達な技法である。

ミルが支配的な時代：俗流経済学の中で古典派の最後としてこの時代にマルクスは抜きん出て立っている。ちょうどスミスが、最初の俗流派であったが古典派の中で孤高であったように。

経済学 Economics (マーシャルの時代) ジェヴォンズとその仲間から、そしてマーシャル

高度に洗練された技法、墮落した概念、そして基本的な前提。

しかし、技法が高度に完成しているため、彼らが意図している前提を時に無意識に修正ささせ（まさに自分自身と矛盾してしまう）、部分的に正しい結論にいたる。

古典派の終わりに素朴な社会主義（オーエン、ホジスキン）が現れてきて、そして俗流経済学が生み出されたことに留意せよ。俗流の時代の終わりにマルクスが現れ、そして経済学 economics が生み出された。

(D3/12/4 : 10)

スラッフアが実際に行った価値論講義の前半の 16 回分は完成された講義用ノートが残っていて、いわば価値学説史というような内容であることがわかる⁸⁾。ただそこにはスラッフア自身の価値論ないし価格理論は示されていない。しかし、上に引用した覚え書から、著作の構成として、まず自身の理論を示し、そのあとで学説史を記述するつもりであったことがわかる。ということは、講義においても、最初にスラッフア自身の価値論ないし価格理論を提示するつもりであったと考えられる。この当時の表現では、スラッフア自身の理論は equations というように表現される。スラッフアが書き残した最初の equations の日付を確定することは困難だが、1927 年 11 月には equations を定式化していて、それをケインズに見せていた（1927 年 11 月 26 日）。1927 年 11 月末までには equations の定式化、すなわち連立方程式による価格決定式、つまり後の生産方程式は基本的にはできていたが、解の存在と一意性の確

8) 講義ノートはスラッフア・ペーパーズの D2/4 に収められている。松本（2011）参照。

認はフランク・ラムジーの助力を得た 1928 年 6 月のことであった。したがって、1928 年 10 月からの講義でスラッフアは自身の理論を最初に示すことはできなかったはずであるが、そのようにした痕跡はない。ひとつの「謎」である⁹⁾。

3. 生産方程式の基礎にある費用概念に関して

スラッフアが生産方程式を講義で取り上げなかった理由の解明は課題として残されるが、生産方程式の基礎にあると考えられる physical real costs の概念を、かれはいつ獲得したのだろうか。ロンドン・ノートから physical real costs に関する記述を抜き出そう。まさに「物的な実質費用 Physical Real Costs」と題された記述である。一部省略している。

物的な実質費用

この観念 conception は、もし考察されているすべての商品（あるいは少なくともその 1 つ）の各々がどんな代替品も持ち得ないならば（奢侈品は当然そのなかに代替品があるので、それゆえ、その商品が絶対的な必需品であるならば）、その場合にのみ主張できるだろう。しかし、もし商品に代替品があるならば、共通の尺度を必要としない諸商品のさまざまな量から成る「一つの」実質費用というのは、もはや存在しない。代替品が存在するやいなや、生産者の生命と能力を維持する条件を満足するような種々の商品の無限の組み合わせが存在する。そのような組み合わせをどのように選べばよいのだろうか。1kg のパン+1/2 kg の肉と 1/4 kg のパン+1kg の肉とのどちらかという選択は、もしそれらの価値の共通の尺度を導入しなければ、もちろん不可能だ。……

しかしながら、実質費用というこの観念に関していべきことがある。一定の効率性のもとで一日に 8 時間働く労働者を永続的に養うのに必要

9) ケインズは 1927 年 11 月 28 日（月）付の妻リディアあての手紙で「土曜日にスラッフアとかれの仕事について長時間話をした。それは非常に興味深く、独創的だ。だが、かれの講義をクラスの学生たちが理解できるだろうかと思う」と伝えている。11 月 26 日（土）にスラッフアがケインズに会い、最初の equations を見せたことは、スラッフアの手帳に記録されている。ケインズの手紙は Gilibert (2006) に引用されている。

な「最低限」の諸商品の組み合わせは無限にあるというのは真実である。種々の商品に関してあるひとつの尺度単位を用いることをしないかぎりこの難問は生ずる。簡単にいえば、ある物品を生産する実質費用は多様な商品の一定の組み合わせだということだ。—もしそれらの商品に代替物がないならば、これは「究極の」観念であろう。

これが事実でなければ、われわれは費用に関して尺度単位を見つけださなければならない。このような単位の必要性は、実際の測定のための要請からではない。それは測定に先立ってであり、費用を考えるのに必要なのである。利用可能な最良の尺度は、平均的な普通の労働者を一時間養うのに必要な種々の商品の量である。もしそのような商品の組がたくさんあるのなら、最少の労働で生産できる一組を選ぶことができる（これはあいまいだ!）。……

このように、労働量に基礎をおくりカードの価値論に対し、2つの解釈がありうる。1) ^{心理的な}主観的な不効用という解釈、2) 生存にとっての客観的物的な必需品という解釈。かれはおそらくその区別を必ずしも明白には考えていなかった。しかし、後者こそがかれの価値論の基礎にある解釈だと私は信ずる。……

労働量であって、労働が受け取る賃金ではない（ひとつの商品を生産するのに必要な労働量であって、労働によって支配される商品量ではない）と断言するリカードの強力な主張は、物的な解釈が正しいことを示している。というのは、実質費用に加えて、労働者は賃金の一部として剰余の一部を受け取り、それゆえ、賃金と費用（労働）は異なるからである。しかし、完全競争システムでは賃金は労働の限界不効用に比例するだろう。それゆえ、もし実質費用の物的解釈が受け入れられるなら、労働量が費用の最良の尺度である。もし不効用解釈が受け入れられるなら、賃金が費用の最良の尺度である。…… (D3/12/3: 44-47)

つぎにロンドン・ノートより少しあとの 1927 年 11 月の覚え書が収められている D3/12/4 から関連する記述を抜き出す。フォルダーにはスラッフアの

字で「End of November 1927 / (large sheets)」と記されている。

費用と価値の退化 Degeneration of cost + value

A. スミス、リカード、マルクスは実際、費用の古い観念 idea から墮落し始めていた。—食料から労働へ。しかし、彼らの概念は多くの場合、なお十分に同一のもの equivalent であった。

1820年から1870年に恐ろしいスピードで変質が進行した。シーニアの節欲とミルの全般的な混乱、ケアンズはそれを最終段階で「犠牲 sacrifice」とした（マーシャルはそれをケアンズから持ってきたのか？ かれの原理、339 ページの註を見よ。そうでもない）。

同時に、価値の基礎を物的な過程から精神的な過程へとシフトさせる過程においてかなり大きな歩みがあった。ジェヴォンズ、メンガー、ワルラス。……
(D3/12/4 : 2(1))

費用概念の展開 Evolution of concept of cost

「1塊のパン the loaf of bread」という正しい費用概念を持っていたのはベティとフィジオクラーツだけであった。その後、同じ量の食糧を必要とする毎日の労働として、それを労働で測定することを誰かが始めた。

その後彼らは費用を現実に労働量と見なすようになった。更に A. スミスは労働を「煩勞と辛苦 the toil and trouble」と解釈した。それは「実質費用」（リカード、p.10、15n）で「苦しみ hardship」である。

それからこれはリカードによって労働に戻された。しかし十分ではなかった。そしてマルクスはリカードと同じだけ戻った。

その後シーニアは節欲を発明した。そしてケアンズはすべての費用（労働、節欲そしてリスク）を犠牲として統合した。

いまやダベンポート、カッセル、ヘンダーソンはさらに一歩、間違った方向への最後の一歩を進んだ。
(D3/12/4 : 4)

もう一つ、「費用概念の展開 Evolution of the concept of cost」と題された

極めて簡潔な一文を原文と合わせて引用しておく。

費用概念の展開

その方向は、費用というものを、生産することを可能にするのに必要な手段という意味から、生産に伴う犠牲に打ち勝つように誰かにやらせるのに必要な誘因という意味へというものであった。

The trend has been from meaning by cost the means necessary to enable production to be made to meaning the incentive required to induce somebody to overcome the sacrifice involved in production.

(D3/12/4 : 7)

スラッフアは D3/12/4 : 3 でペティ『政治算術』の序文から「著者の立論の立場と態度」の見出しが付されたパラグラフ全体を抜書きしている（大内兵衛・松川七郎訳『政治算術』岩波文庫、1955 年、24-25 頁）。ペティの記述の主旨は、かれの議論は数 Number、重量 Weight、尺度 Measure を用いて表現するもので、特定の人々の感じ方 Minds、意見 Opinions、好み Appetites、感情 Passions などにはよらないというものである。スラッフアはこの抜書きのあとに、2つの付記をしている。一つはこの抜書き箇所をマルクスが『経済学批判』の注（武田隆夫他訳、岩波文庫、1956 年、59 頁の注 16）で、「ペティが新しい科学の建設を意識していたことの証拠として引用している」ということ、もう一つはペティの『アイアランドの政治的解剖』の序文（松川七郎訳、岩波文庫、1951 年、21-23 頁）での「the same “physician’s” outlook of Petty」と対照せよということの付記である。

このようにスラッフアの physical real costs 概念はペティによっていることがわかり、それが彼の生産方程式に反映されている。というのは、スラッフアの生産方程式は、考え始めた当初から物的な投入と産出の関係における再生産を可能にするような価格に関するものだからである。価格は単なる一時的な交換比率ではなく、生産と消費が繰り返されるための物的な交換の条件を明らか

にするものであった。

ところでスラッフアはペティの方法にいつ気づいたのだろうか。1927年夏のロンドン・ノートの「Physical Real Costs」と題された記述にはペティの名前は出てこない。ペティの名前が出てくるのは1927年11月の覚え書であり、同時期に生産方程式、すなわち当時の equations の定式化がなされている。筆者は、スラッフアがペティを意識したのは、マルクスの『経済学批判』や『剰余価値学説史』なども考えられるが、マーシャルの『経済学原理』からの示唆の可能性が大いにあるのではないかと考えている。

1925年論文を執筆するまでにスラッフアがマーシャル『経済学原理』を精読していたことは、その論文だけからでもわかるが、すでに紹介したように Naldi が報告している。スラッフアは1925年論文の注で、マーシャルのペティに関する記述を引用している (Sraffa 1925, p.324, 邦訳 79-80 頁)。スラッフアが引用した部分の前後を含めてマーシャルの記述を示すところである。

……イギリスの古典派の経済学者は、賃金の最低限は穀物の価格に依存するとしばしが書いている。しかし彼らが「穀物 corn」という用語を用いる時には、農業生産物一般の簡略語として用いているのである。それはちょうどペティが (『課税と貢納』第十四章)、「穀物の耕作について語る時には、われわれはこの言葉を、主の祈りの中のパンという言葉がそうであるように、生活のあらゆる必需品を含むものと考え」といつているのといく分似ている。もちろんリカードは、労働者階級の将来について、今日われわれが持っているよりも望みの少ない見方をしていた。今日では、農業労働者でさえ彼の家族を立派に養うことができ、また何がしか貯蓄できるものを持っている。ところが、当時は、熟練工でさえ、少なくとも不作の年には、家族のために豊富で良質の食物を買うのに、賃金の全部を必要としたようである。……

永澤越郎訳『マーシャル 経済学原理』第四分冊、1985年、9-10頁、
注(9)

スラッフアは、古典派経済学の corn ということばの使い方や physical real costs につながるような考え方を、マーシャル『経済学原理』の記述のなかに示唆を得たのではなかったか。ただ、1925 年論文執筆時点では、ベティの原典をまだ直接は読んでいなかったのかもしれない。1927 年夏のロンドン・ノートでの記述や 1927 年 11 月に記されたと思われる覚え書で示された費用に関するスラッフアの考え方を基礎にして、生産方程式、すなわち equations の定式化がなされたと考えられる。とはいえ、physical real costs や equations が価値論講義、少なくとも D2/4 に収められた講義ノートに反映されなかったのは「謎」である。

むすび

スラッフアは価値論講義の準備過程で、自身の考えを著作にまとめる構想をもった。それは、まず自身の理論を展開し、その後に関連する学説史を置くというものであった。ここでスラッフア自身の理論とは価格理論であり、それは生産方程式で、当時でいえば equations で表現されるものであった。そして基本的にはそれは、1927 年 11 月に、遅くとも 1928 年 6 月には数学的証明を含めて定式化されていた。しかし、1928 年 10 月以降、1931 年のイースター学期まで、計 3 学年度提供された価値論講義では生産方程式は扱われなかったし、単独の形での公表もされなかった。

生産方程式に関していえば、『商品による商品の生産』と比べれば課題は残されていたのかもしれない。しかし、『商品による商品の生産』冒頭の諸命題（それは生産方程式で表される）が 1920 年代終わりまでには形を整えていたと、スラッフア自身述べている (Sraffa 1960, Preface)。標準商品、標準体系の構成は極めて独創的であるが、価格理論としては必ずしも必須ではない。その意味ではまだ不明の点が残されている。

もう一点、スラッフアの生産方程式の基礎にある physical real costs がウイリアム・ベティに拠っているはわかったが、スラッフアがいつベティの著作にそれを見つけたのかは、まだ確定できていない。そのきっかけの可能性として考えられるのは、マルクス『経済学批判』とマーシャル『経済学原理』があ

る。1927年に執筆されたスラッフアの覚え書にはマルクスへの言及があるが、1925年論文でのマーシャルへの言及もある。スラッフアがペティの著作をいつ読んだかを別にして、ペティの名前は1920年代のはじめころには知っていただろう。1922年にLSEに学んだときにキャナンの講義でペティへの言及があったかも知れない。ただ、キャナンの『生産と分配の理論の歴史』(Cannan 1893)で言及されているペティに関していえば physical real costs に結びつくような箇所はない。スラッフアがペティに行き当たった最初の直接の切っ掛けは何であったのかの解明は残されたままである。

付録 スラッフア・ペーパーズの D2 に関するカタログ記載事項

D2 Lectures

Sraffa did not enjoy the pressure of being in the limelight, and found lecturing stressful. While at Cambridge he only gave two series of lectures for the economics faculty on the theory of value (1927-31) and on industry (1941-43). A few other lectures survive, dating from the same two brief periods of Sraffa's life.

(カタログには D2 に関して上記のように記載されているが、スラッフアがケインブリジ大学経済学部で提供した講義は 2 科目ではなく、下記の D2/5 を 2 回、1929 年と 1930 年のイースター学期に行っている。なお科目名は当時の時間割表などによると Banking on the Continent であった。1927-28 学年度には予定していた講義を行わなかった。)

D2/1	Lecture notes on economic theory (1 doc)	n.d.
D2/2	“The corporative state”, given to the “Keynes Club” (1 doc)	1927
D2/3	“Revalorization of the lira”, given to the Emmanuel Economic Society (1 doc)	3 Nov 1927
D2/4	Lectures on advanced theory of value given to students undertaking the economics tripos (1 doc)	1928-31
D2/5	Lectures on continental banking (6 docs)	1929
D2/6	“Il banchieri fiorentini nel 200”, given to the Cambridge	

- Italian Society (1 doc) 14 May 1929
- D2/7 Two lectures on Italian problems given at politico-military courses at the Cambridge branch of the Intelligence Training Centre, with notes précis and newscuttings (26 docs) 1941-43
- D2/8 Lectures on industry given to students undertaking the economics tripos, with newscuttings and an offprint of *Production Front: What can be done ?* by Maurice Dobb (44 docs) 1941-43

参考文献

- Cannan, E. (1893) *A History of the Theories of Production and Distribution in English Political Economy 1776 to 1848* (First ed. 1897), Reprint of the third edition, Routledge/Thoemmes Press, 1997
- De Vivo, G. (2003) "Sraffa's Path to *Production of Commodities by Means of Commodities*. An Interpretation", *Contributions to Political Economy*, Vol.22
- Gilibert, G. (2006) "The Man from the Moon: Sraffa's Upside-Down Approach to the Theory of Value", *Contributions to Political Economy*, Vol.25
- Naldi, Nerio (1998) "Some Notes on Piero Sraffa's Biography, 1917-27", *Review of Political Economy*, Vol.10, No.4
- Naldi, Nerio (2011) "Three notes on Piero Sraffa's early economic writings: 1920-26" in *Sraffa and Modern Economics*, Vol.II, ed. by Roberto Ciccone et al., Routledge
- Pasinetti, Luigi L. (2001) "Continuity and change in Sraffa's thought, An archival excursus", in *Piero Sraffa's Political Economy, A centenary estimate*, ed. by Terenzio Cozzi and Roberto Marchionatti, Routledge
- Porta, P. L (2001) "Sraffa's Ricardo after fifty years, A preliminary estimate", in *Reflections on the Classical Canon in Economics. Essays in honor of Samuel Hollander*, ed. by Evelyn L. Forget et al. Routledge
- Sraffa, Piero (1925) "Sulle relazioni fra costo e quantità prodotta", *Annali di economia*, II (菱山泉訳「生産費用と生産量との関係について」菱山泉・田口芳弘訳『経済学における古典と近代』有斐閣、1956年所収)

松本：価値論講義準備過程でスラッファが生産方程式を着想した源は何か

Sraffa, Piero (1926) “The Laws of Returns under Competitive Conditions”,
Economic Journal, Vol.XXXVI

Sraffa, Piero (1960) *Production of Commodities by Means of Commodities*
: *Prelude to a Critique of Economic Theory*, Cambridge University Press

松本有一 (1992) 「スラッファの人事問題におけるケインズの力」『経済学論究』第
46 卷第 2 号、7 月

松本有一 (2009) 「スラッファの生産方程式の端緒を探る—予備的考察—」『経済学
論究』第 63 卷第 3 号、12 月

松本有一 (2010) 「『商品による商品の生産』へのスラッファの歩み」『経済学論究』
第 64 卷第 1 号、6 月

松本有一 (2011) 「スラッファの価値論講義と生産方程式の原型」『経済学論究』第
64 卷第 4 号、3 月